

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520017

研究課題名(和文)「原因」「因果」概念との比較に基づく「おのずから」概念の研究

研究課題名(英文)The study of the concept of Onozukara based on a comparison with the concept of causality Abstract

研究代表者

遠山 敦 (THOYAMA, Atsushi)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：70212066

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：「おのずから」概念については、これまでも、日本における哲学的思惟の基層をなすものとしてその重要性が注目されてきた。しかしそこでは、「おのずから」が日本思想に限定された特殊な概念と捉えられ、広く諸思想との対比からその内容が明確に規定されることがなかった。本研究では、「原因」「因果」という観点から「おのずから」概念に注目し、東西諸思想における「原因」「因果」概念との比較を通じて、その特質の明確化を行った。

研究成果の概要(英文)：The concept of Onozukara has been emphasized in its forming the foundation of Japanese philosophical thoughts. Yet, since it has been regarded as a concept peculiar to Japanese thoughts, its content has not been specified through a comparison with various thoughts in the world. In this study, we characterized the concept of Onozukara in terms of causality, and clarified its essence by comparing it with the concepts of causality in Eastern and Western thoughts.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：おのずから 原因 因果

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、「自然」と翻訳される諸概念間の差異に関する哲学的研究」(科学研究費補助金・基盤研究(C)、平成19年度 - 平成21年度)の研究分担者として、日本における「自然」概念の検討を行ってきた。この研究は、西洋古代にまで遡って、現在「自然」と翻訳されている諸概念を見直し、現代に至るまでの「自然」の意味の変遷をたどるとともに、それをインド、中国、日本の思想における「自然」理解と照らし合わせながら、比較思想的に「自然」観の再検討を行うことを目的とするものであった(研究成果の一部は、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会、2009年3月)として公刊された)。そしてこの研究を進める過程で浮上したのが、西洋や東洋の思想において、「自然」と名づけられる事象はそもそも何を「原因」として成立しているのか、そして日本の伝統的「自然(ジネン)」=「おのずから」概念は、「原因」という観点から、東西諸思想とどのように交差したか乖離するかという問題であった。たとえば一般に「おのずから」と極めて近接した概念とされる老荘の「自然」は、上記研究によりその原義においては大きな思想的意味を持つものではなく(語の頻度も極めて少ない)究極「原因」としての「道」という形而上的実体の様態を表すに過ぎないことが明らかとなった。これを、形而上の実体を想定しない「おのずから」と比較するとき、両者の「原因」に関する相違が注目されてくる。あるいは近代の進化論受容に関して言えば、その「自然淘汰」は「おのずからの淘汰」として理解されたとされる。外的自然条件という明確な「原因」を想定する「進化論」は、「おのずから」なる進化として理解されたのであり、そこに「原因」性に対する理解の相違が問題となるといえよう。このような問題意識に、東西諸思想の「原因」「因果」概念との比較に基づき「おのずから」概念の内実を明らかにしようとする、本研究の出発点がある。

2. 研究の目的

本研究は、日本の哲学的思惟の基層をなす「おのずから」概念の特質を、東西諸思想における「原因」「因果」概念との対比を通して明らかにしようとするものである。「おのずから」概念の重要性については、すでに先行研究において注目されてきたが(相良亨「「おのずから」形而上学」(1995);竹内整一『「おのずから」と「みずから」 - 日本思想の基層 - 』(2004)など)、それらは、「おのずから」を日本思想に限定された特殊概念として捉え、広く諸思想との対比からその姿を明確にしたものとなっていない。これに対し本研究は、「原因」「因果」という観点から「おのずから」概念に注目し、東西諸思想における「原因」「因果」概念の検討を通じ、それとの対比から、「おのずから」概念を一般的

な哲学的概念として位置づけ、その特質の明確化を図ろうとするものである。

3. 研究の方法

(1)月に1回をめぐり、三重大学に所属する研究者を中心に定例研究会を開催するとともに、研究組織に所属する研究者全員による全体研究会を開催し、研究代表者および研究分担者それぞれの専門領域の立場から「原因」「因果」理解について個別の研究報告を行い、その知見を参加者全員で共有する。ここでは、西洋古代・中世哲学、西洋近・現代哲学、およびインド、中国、日本思想に関して、その「原因」「因果」把握の思想的特徴が包括的に報告され、それらとの異同の検討を通して、「おのずから」概念の特質を明らかにしてゆく。それにあたり、以下の(2)(3)の点について、特に注目する。

(2)生成論における「おのずから」概念の特質把握：万物の生成について、近世の儒者伊藤仁斎はそれを「おのずから」なる「生々」とし、山鹿素行は「已むことを得ざるの自然」と捉えた。こうした近世儒学における「おのずから」なる生成の内実を、「原因」の観点から検討する。具体的には、ギリシア哲学、中世神学、西欧近代哲学、及び中国道家思想における「原因」概念との比較を通じて、「おのずから」概念の特質を明らかにする。

(3)時間論(歴史意識)における「おのずから」概念の特質把握：中世の代表的歴史書である慈円『愚管抄』は、仏教の四劫観等に依拠しつつ、歴史に「因果」の道理の貫徹を見いだしたが、それはまた歴史の「おのずから」なる推移を意味するものであった。こうした「おのずから」なる歴史把握を「因果」の観点から検討する。具体的には、部派仏教及び中観派の哲学、西欧近代哲学、西欧科学、西欧近代史の歴史観、及び絵画芸術における時間表現に見られる「因果」概念(観念)の比較を通じて、「おのずから」概念の特質を明らかにする。

4. 研究成果

(1)西洋思想の文脈において「原因」や「結果」の概念は、主として事物の存在や、その運動・変化に関して問われてきた。古代・中世においては、事物の存在、運動・変化の「原因」を、事物そのものが有する本質・本性に基づくものとするアリストテレス・スコラ的理解、及びそれを第一原因としての神に求めるキリスト教的理解がその代表的なものである。そこでは、事物・事象究極的な「原因」が、何らかの形而上の実体に求められていたといえよう。一方近代において、デカルトは(最高原因としての神を認めつつも)因果関係を物体間に働く機械的作用として捉えるが、ヒュームに至ると、因果性は事象の生起の規則性(恒常的连接)に還元され、因

果推論を行う人間の認識の問題へと転換されることとなる。さらにカントは、因果性を人間に備わるアプリオリな思惟形式（純粹悟性概念）と捉えるに至った。

これに対して「おのずから」的思惟を代表すると考えられる日本近世の儒者伊藤仁斎は、事物の存在やその変化・運動について次のように述べる。

「今もし板六片をもって相合せて匣と作り、密かに蓋をもってその上加えるときは、則ち自ずから氣有ってその内に盈つ。氣有ってその内に盈つときは、則ち自ずから白醜を生ず。すでに白醜を生ずるときは、則ち又自ずから蛙蟬を生ず。これ自然の理なり。…是の氣や、従って生ずる所無く、亦従って来る所無し。」

ここには、天地を構成する「一元氣」の生々の運動が「原因」となって事物・事象が生み出される様が描かれ、それが「自ずから」あるいは「自然の理」として把握されている。だが仁斎はまた、その「氣」について、「従って生ずる所無く、亦従って来る所無し」とも述べる。こうした仁斎の発言には、中国宋代の朱子学に対する批判がこめられている。朱子学も万物は「氣」によって構成されるとするが、そこでは氣の背後にさらに、氣の運動をかくあらしめている原因として形而上的な「理」の存在が主張される。仁斎はそうした朱子学の「理」を否定するのである。さらに仁斎は「万物は五行に本づく。五行は陰陽に本づく。再び推して陰陽の然る所以に至るときは、則ちこれを理に帰せざること能わず。既に理に帰るときは、則ち自ずから虚無に陥らざること能わず。…聖人能く天地の一大活物にして、理の字をもってこれを尽くすからざることを識る。」とし、原因・根拠を形而上レベルに遡源的に探究することの無効を説く。これらの事を総合すると、ここでの「おのずから」概念の特質を次のようにまとめることができる。

事物の存在や、その変化・運動の「原因」は、形而上的な実体ではなく、「天」の生成（「流行」）という、現実的・形而下的運動に求められる。

形而上レベルで「原因」を遡源的に探究すること自体に認識の陥穽があり、「天」の「おのずから」なる生成の運動は、それ以上「原因」を想定できない、その意味で「因果」を越えたものと捉えられる。

(2) 東洋思想の文脈において「原因」や「因果」の概念は、主として、人の行為とそれがもたらす善悪や吉凶禍福の応報との関係、即ち「因果応報」という倫理的レベルで問われてきた。「縁起」をその基底的な教理とする仏教においては、人の善悪の行為がそれぞれ楽果・苦果となって現れること（善因楽果、悪因苦果）がこの世を貫徹する理法と捉えら

れる。また中国の儒家思想においては、自己の行為の善悪が人に吉凶禍福をもたらすことが、孔子および孟子においては「天」を貫く法則として、さらに荀子に至っては「同類相求」の原理として理解された。

これに対して伊藤仁斎は、「天命」について次のように述べる。

「蓋し天とは、専ら自然に出でて、人力の能く為す所に非ず。命とは、人力に出づるに似て、而も人力の能く及ぶ所に非ず。」

上記(1)に見たように、仁斎にあってこの世の事物・事象は「天」の生成の運動（「流行」）によってもたらされるものと考えられた。さらに仁斎はそうした「天」の生成運動を「善」なるものと捉え、その運動に対する「順」「逆」をもって善・悪を規定してもいる。だがそうした「天」の生成運動は、「専ら自然に出でて、人力の能く為す所に非ず」と述べられ、人倫世界の「国の存亡、道の興廢」は人力の及ばない「おのずから」なるものとされる（仁斎においてそれはまた、「時」「勢」とも言われる）。具体的な人の行為は、「国の存亡、道の興廢」と直接関わりのないものとして、両者の関係は絶たれるのである。このことはまた、人に降りかかる吉凶禍福として理解される「命」にも及び、一見人の行為によってもたらされると思われる吉凶禍福もまた、「人力の能く及ぶ所に非ず」とされる。仁斎において「命」は、「天」の「おのずから」なる運動がもたらす吉凶禍福であり、人はそれを「天」の善の現れと捉え、「疑わず」そこに「安ん」じることが求められることとなる。これらを総合すると、ここでの「おのずから」概念の特質を次のようにまとめることができる。

「天」の「おのずから」なる生成の運動は、人の具体的な行為と関わりを持たず、それ自身として運動するものと捉えられる。

人の善悪は、絶対的に「善」とされるそうした「天」の「おのずから」なる生成の運動に対する「順」「逆」のありようとして規定され、吉凶禍福は（たとえそれがネガティブなものであっても）「天」の善性の現れとしてそこに「安んず」べきものとされる。

(3) さらに「おのずから」概念は、歴史の推移という観点から、「因果」概念と次のような関わりを見せる。日本中世を代表する歴史書『愚管抄』は、神武天皇から順徳天皇に至る我が国の歴史を、独特の「道理」史観によって捉えたことで知られる。だが、そうした『愚管抄』における「道理」は決して一義的なものではなく、極めて多義的で複雑な様相を帯びており、それを最も象徴するのが、「道理」を時の推移にともなって作り替えられていくものとする把握である。著者慈円によれば、「大方世ノタメ人ノタメヨカルベキヤウ」としての「道理」は、時の変遷によって「ウ

ツリユク」ものとされるのである。ここで注目されるのが、源平の争乱における宝剣喪失事件を巡る慈円の次の主張である。

「大方八上下ノ人ノ運命モ三世ノ時運モ、法爾自然ニウツリユク事ナレバ、イミジクカヤウニ思ヒアハスルモ、イハレズトヲモフ人モアルベケレドモ、三世ニ因果ノ道理ト云物ヲヒシトヲキツレバ、ソノ道理ト法爾ノ時運トノモトヨリヒシトツクリ合セラレテ、ナガレクダリモエノボル事ニテ侍ナリ。」

慈円は宝剣喪失について、その背後に、武士の台頭した世のありようにふさわしく作り替えられた「道理」(摂家将軍体制)の存在を認めていた。これに対して、およそ人の運命や過去・現在・未来という三世の時の巡り合わせは、「法爾自然」に移りゆくものであり、そこに「道理」を見いだすことはできない、と考える人がいる。人力の及ばない「法爾自然」なる時の推移(例えば四劫観など)においては、あらゆる事象について、「かくあるべき」という性格を帯びた「道理」の存在をそこに想定することはできず、事態は時の推移とともに、いわばあるがままに生起するだけだ。反論者の主張はこうした論理に基づくものであろう。だがこれに対して慈円は、「三世ノ時運」が「法爾自然」に推移するものであることを認めつつも、なお、そこに「因果ノ道理」を押し当ててみれば、両者が「モトヨリヒシトツクリ合セラレテ」いることが分かる、という。ここには、為政のあるべきありようとしての「因果の道理」が、いわば「おのずから」なる時の推移に寄り添う形で作り替えられてきたという理解を見ることが出来る。しかし一方慈円は、もし「無道に事を行な」うならば、「百王をだに待ちつけずして」世は末になるであろうとも述べ、人の為政のありようが「法爾自然」の時の推移を変更させようことを示唆してもいる。上述(2)で指摘した点を含め、人の行為と「おのずから」の関係には、なお探究すべき問題が多く残されていると言わねばならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計20件)

遠山 敦、愚管抄における因果と自然、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十六号、2014、pp.149-161

小川 眞里子、リスターの微生物学研究、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十六号、2014、pp.39-55

藤田 伸也、中国古代美術における時間

と空間、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十六号、2014、pp.58-68

久間 泰賢、業と解脱、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十六号、2014、pp.94-108

遠山 敦、「天」の流行とその「命」、三重大学出版会、因果の探究、査読無、探究シリーズ6、2013、pp.159-168

小川 眞里子、産褥熱の原因究明、三重大学出版会、因果の探究、査読無、探究シリーズ6、2013、pp.11-24

片倉 望、中国古代における儒家の因果、三重大学出版会、因果の探究、査読無、探究シリーズ6、2013、pp.131-144

秋本 ひろと、ヒュームとマルブランジュ - 経験主義と合理主義の因果論 -、三重大学出版会、因果の探究、査読無、探究シリーズ6、2013、pp.81-94

田中 綾乃、カントの因果論をめぐって、三重大学出版会、因果の探究、査読無、探究シリーズ6、2013、pp.95-106

藤田 伸也、中国絵画の伝統と西洋画法 - 画の六法と郎世寧 -、三重大学出版会、因果の探究、査読無、探究シリーズ6、2013、pp.145-158

森脇 由美子、運河がもたらしたもの - エリー運河の建設とアメリカ社会 -、三重大学出版会、因果の探究、査読無、探究シリーズ6、2013、pp.25-38

斎藤 明、仏教における行為と因果 - 複人称の倫理 -、三重大学出版会、因果の探究、査読無、探究シリーズ6、2013、pp.121-130

桑原 直巳、自由の因果性と不滅の知性的靈魂 - キリシタン時代におけるイエズス会宣教師と日本仏教との出逢い -、三重大学出版会、因果の探究、査読無、探究シリーズ6、2013、pp.107-119

遠山 敦、伊藤仁斎における「天命」、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十五号、2012、pp.116-136

小川 眞里子、産褥熱の病因論、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十五号、2012、pp.27-48

片倉 望、中国古代における因果応報の構造(一)、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十五号、2012、pp.100-115

秋本 ひろと、ヒュームの因果論、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十五号、2012、pp.64-76

田中 綾乃、カントの因果論を巡って、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室、論集、査読無、第十五号、2012、pp.91-99

藤田 伸也、中国絵画の写実 - 清朝洋風画家郎世寧からの回顧 - 三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十五号、2012、pp.49-63

森脇 由美子、エリー運河の建設と市場社会 - 19世紀前半におけるニューヨーク州西部の社会変化 - 、三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理学教室編、論集、査読無、第十五号、2012、pp.77-90

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠山 敦 (TOHYAMA, Atsushi)
三重大学・人文学部・教授

研究者番号：70212066

(2) 研究分担者

小川 真里子 (OGAWA, Mariko)
三重大学・人文学部・特任教授(教育担当)
研究者番号：00185513

片倉 望 (KATAKURA, Nozomi)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：70194769

秋元 ひろと (AKIMOTO, Hiroto)
三重大学・教育学部・教授
研究者番号：80242923

久間 泰賢 (KYUUMA, Taiken)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：60324498

田中 綾乃 (TANAKA, Ayano)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：70528760

藤田 伸也 (FUJITA, Shinya)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：20283509

森脇 由美子 (MORIWAKI, Yumiko)
三重大学・人文学部・教授
研究者番号：10314105

斎藤 明 (SAITOU, Akira)
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：80170489

桑原 直巳 (KUWABARA, Naomi)
筑波大学・人文社会科学系研究科(系)・教授
研究者番号：20178156

(3) 連携研究者

()

研究者番号：